

色気を出すな

富士山で仕事をするようになって二か月、山小

屋をベースに東麓全域の森や動物たちの様子を調べながら毎日山中を歩いていた。ある朝、私は富士山東麓にある沢の崖下で若いニホンカモシカの死体を見つけた。単に足を滑らせたのか野犬に襲われたのか、ともかく山小屋まで運んだ。小屋では改修のために東京からやってきていた大工さんが仕事をしていたが、特に言葉を交わすこともなく、その日は早めに山を下り、営林署などに報告した。

翌朝、地元紙の記者が取材にやってきた。「特別天然記念物ニホンカモシカ、死体で発見！」というわけだ。「場所は……」、「死因は……」、「密猟じゃないですか……」と質問が相次いだ。しかし私は「弾の跡はないし……。事故の可能性が高いですね」と短く答えた。記者は密猟にこだわっていた。そうでないと記事にはなりにくいのだろう。でも事実と違うことを認めるわけにはいかな

い。しばらくして記者は帰っていった。

静けさが戻った山小屋のストロブにあたりながらコーヒーを飲んでるとき、大工さんが静かな声で「今泉さん、色気を出さずにやれば、きっと良い結果がついてきますよ」と言った。でも「色気を出す」という言葉の意味が当時の私には正確にはよく分からなかった。色気＝女性としか思っていないから……。

辞書で「色気」を引くと、異性を引きつける性的魅力：「色気のある女」、異性への関心、欲求：「年頃になって色気がつく」などのほかに、物事に対する積極的な気持ち、野心：「大臣の椅子に色気を示す」などといういろいろある。そう、大工さんが言ったのは、この最後の意味だったのである。以来、私は色気を出さないように、気をつけて生きてきた。

最近、世の中には色気のありすぎる人が多い。何事にも積極的というのとは良いことだが、実力に見合った積極性でないと恥をかく。いや、「恥」を「恥」とも感じない人が増えたのだろう。テレビやインターネットのせいなのか、恥じらいのない色気は見ちゃいけない。

五十年近くも昔、富士山の山小屋でベテランの大工さんは、ポツンと一言でそれを教えてくれたのである。



1944年東京都生まれ。東京水産大学(現 東京海洋大学)卒業後、国立科学博物館の特別研究生として、哺乳類の生態調査に参加。その後、文部省(現 文部科学省)の国際生物学事業計画調査などにも参加した。監修をつとめた「ざんねんな生き物事典」(高橋書店)は、2018年「子どもの本」総選挙で1位に選ばれ、シリーズ累計発行部数250万部を超えた。ほかにも動物関連の著書多数。